引用改変の状況

—山崎豊子『不毛地帯』におけるシベリア抑留者の描写—

徳 永 光 展

要 旨

山崎豊子『不毛地帯』では、大本営陸軍部に勤務していた壹岐正が戦後シベリアに抑留され、苛酷な労働に従事させられた顛末が記録されている。「サンデー毎日」に初出連載された際、今井源治（筆名：いまいげんじ）が自らのシベリア体験を記した『シベリヤの歌』に酷似した表現が多数見られる旨、山崎に抗議した。その様子は当時の新聞各社によっても広く記事にされたが、今井からみて納得のいく説明が得られなかったため、後に今井は『山崎豊子の『盗用』事件』を上梓する。けれども、今回の調査からは、山崎が他の記録作品からもシベリア抑留に関する記述を多数改変引用していた事実が明らかとなった。

キーワード：『不毛地帯』・『無抵抗の抵抗』・『苦難に堪えて』・「裁判と監獄」・シベリア抑留者の描写

1. はじめに

山崎豊子は1973年8月より、『不毛地帯』を雑誌「サンデー毎日」に連載した¹⁾。すると、程なくして今井源治が自らの抑留体験記である『シベリヤの歌』²⁾からの改変引用がシベリアの描写部分について、多数見受けられる状況を発見し、新聞各社も一面でその事実を記事にするという事件へと発展した。山崎は、1973年10月21日朝刊にて他社に先んじて記事にした朝日新聞社を相手に名誉棄損だとして訴訟を起こした。この裁判は4年余りにわたって争われた後、1978年3月31日に両者が和解する結果を迎える³⁾。

山崎が既発表資料を大幅に自作へ取り込んで、物議を醸した例は先にも後にもあった。『不毛地帯』の前には「花宴」に疑惑が生じ、結果として山崎は日本文芸家協会を脱退させられる憂き目にあう⁴⁾。また、後には『大地の子』で、遠藤誉の『卡子 出口なき大地』⁵⁾からの引用が疑われる箇所が多数発見され、遠藤は山崎を訴えるに至る。司法では、一審で山崎の勝訴となって結審するが、

納得のいかなかった遠藤は今井が行った先行例を参照しつつ、山崎が自らの体験記のどの部分をどう改変して引用したかを具体的に明らかにし、偶然にしては出来過ぎである様子に言及を進めた⁶⁾。

よって、この作家を論究する際には、今井や遠藤による抗議を避けては通れなくなっている。両者の記述を追う限り、山崎は「盗用」を行ったと判断せざるを得ないが、彼らは自らが書き込んだ文章に限定した形で、山崎の姿勢を非難している。また、今井や遠藤の立場に言及する鵜飼清⁷⁾、前川文夫⁸⁾、栗原裕一郎⁹⁾らも、考察の範囲は両者の言い分を認める形での発言となっている。

今回、シベリアに関する記述がある『山崎豊子全集 第12巻』の巻末に掲げられている参考文献一覧¹⁰⁾の中から幾つかの資料を収集してみたところ、今井が指摘するレベルでの改変引用の痕跡が認められる書物は他にもある事実が判明した。抗議者が当時、『不毛地帯』については今井しかいなかったために、マスコミを騒がせたのは今井と山崎との対決に収斂された。けれども、他作品の物言わぬ作者達が、『不毛地帯』で壹岐正が体験したシベリア抑留に関する記述を目の当たりに

したら、今井と同様に驚きを禁じ得なかったのではないかと疑われるのである。

本稿は、参考文献とされる一群のうち、いずれも1958（昭和33）年に日刊労働通信社から徳永笹市の編集による「シベリヤ叢書」として発表された石田三郎『無抵抗の抵抗』¹¹⁾、秦彦三郎『苦難に堪えて』¹²⁾、並びに松村知勝「裁判と監獄」¹³⁾を取り上げ、それらの抑留記を今井が行ったのと同じ手法で分析しようとする試みである。

秦と松村については、略歴が確認できたので以下で紹介しておきたい。

秦彦三郎（1890年10月15日～1959年3月20日、三重県出身）は、農業・材木商を営む秦駒太郎の長男として生まれた。富田中学校を経て、1909年12月士候生となる。1912年5月、陸軍士官学校卒業。同年12月、少尉・歩兵51連隊付。1915年12月、中尉。1916年12月、陸軍大学校に入学。1919年11月、同校卒業。1920年4月、参謀本部付勤務。1922年2月、大尉・参謀本部員（ロシア班）。1923年8月、関東軍司令部付（満州里機関長）。1925年12月、参謀本部員。1926年12月、ソ連大使館付武官補佐官。1927年12月、少佐。1928年参謀本部員。1930年6月、ポーランド公使館付武官。同月より1931年6月まではラトビア公使館付武官を兼務した。1931年8月、中佐。1932年4月から同年12月まではルーマニア公使館付武官を兼務。1932年12月、参謀本部付。1933年3月、参謀本部員（ロシア班長）。1934年3月、ソ連大使館付武官。1936年3月、大佐。兵器本廠付。1937年8月、歩兵57連隊長。1938年7月、関東軍司令部付（ハルピン特務機関長）。1939年3月、少将。1940年3月、関東軍参謀副長。1941年5月、北支方那方面軍司令付。1941年7月、関東軍参謀副長（兼秦機関長）。1941年10月、中將。1942年10月、第34師団長。1943年4月、参謀次長・大本営兵站總監。1944年3月～同年8月、陸軍大学校校長を兼務。1945年4月、関東軍総参謀長。終戦を迎える。ロシア語にも長け、1945年8月19日には、山田乙三関東軍総司令官や瀬島龍三らと共にジャリコーヴォでアレクサンダー・ワシレフスキー元帥（極東ソ連軍総司令官）に会い、停戦交渉を行った。その後、9月にシベリア抑留。1952年2月に重労働25年の判決をソ連より受ける。1956年12月、シベリアより復員。著書としては、本稿で考察する『苦難に堪えて』を残した¹⁴⁾。

松村知勝（1899年10月13日～1979年5月7日、福井県出身）は、陸軍中將であった松村法吉の長男として生まれた。弟の辰雄は陸軍中佐。妻の英子は、陸軍中將であった石坂善次郎の娘。妹の夫は、陸軍中將の樋口敬七郎である。東京府立第四中学校、中央幼年学校予科、中央幼年学校を経て、1921年7月に陸軍士官学校を卒業した。1921年10月、少尉・歩兵34連隊付。1924年10月、中尉。1925年3月、陸地測量部員。1925年12月、陸軍大学校に入学。1928年12月、同校卒業。1929年12月、参謀本部付勤務。1930年8月、大尉。1930年12月参謀本部員。1932年6月、歩兵学校教官。1933年2月、ポーランド・ソ連駐在。1935年5月、ポーランド兼ルーマニア公使館付武官補佐官。1936年3月、陸軍大学校教官。1936年8月、少佐。1937年1月、参謀本部員。1938年7月、中佐。1940年12月、参謀本部戦史課長・大本営研究班長。1941年3月、大佐。1941年10月、参謀本部ロシア課長。1943年8月、関東軍参謀。1945年3月、少将・関東軍総参謀副長。1945年9月、シベリア抑留。1946年9月17日には大陸鉄道司令官だった草場辰巳、関東軍参謀だった瀬島龍三と共にウラジオストックから羽田に護送され、極東国際軍事裁判（東京裁判）では瀬島と共にソ連側証人として出廷した。1949年8月、重労働25年の判決をソ連より受けた。1956年12月、シベリアより復員。著書としては、『関東軍参謀副長の手記』（芙蓉書房 1977年7月）を残した¹⁵⁾。

なお、石田、秦、松村の3名は全集巻末に今井源治と共に談話提供者として名前が挙がっている¹⁶⁾。以下、『無抵抗の抵抗』『苦難に堪えて』『裁判と監獄』の頁順に問題箇所を示し、その後に対応可能性が考えられる『不毛地帯』の箇所を掲げて、若干の比較分析を施す。『不毛地帯』の該当頁は行き来することとなる。

2. 石田三郎『無抵抗の抵抗』

2.1 大堀事件と堀事件

2.1.1 『無抵抗の抵抗』

大堀事件（16頁）

2.1.2 『不毛地帯』

堀事件（298頁）

2.1.3 比較分析

「大堀」を敢えて「堀」と書き改める。ハバロフスク事件¹⁷⁾を知っている読者であれば、事件

の概要が脚色されて描かれている事実に気付いたのである。また、山崎も敢えてそのような効果を狙って、このような改変の痕跡を残す形での書き換えを行っていたとみることもできる。

2.2 独立採算制強制収容所の労働力

2.2.1 『無抵抗の抵抗』

これがもし他のソ連人囚人収容所の場合だと、この独立採算制もそれ程苦痛とはならないようである。それはソ連人収容所の場合には、年月の経過があつても、常に総体的に労働力の上には新陳代謝が行われ、十年前でも現在でもその収容力の労働力——労働賃銀——収容所の収入に大差はないのである。(22頁)

2.2.2 『不毛地帯』

独立採算制におけるわれわれ日本人収容所と、他のソ連人収容所との根本的な違いが、どこにあるか、お気付きですか、それはソ連人収容所の場合には、常に行なわれる移動^{エタップ}によって、労働力に新陳代謝が行なわれ、十年前も、現在でも、収容所の収入に大差はないのです、(304頁)

2.2.3 比較分析

「独立採算制」の収容所経営に関する問題点を述べた箇所である。「ソ連人収容所の場合」以下が『不毛地帯』では会話文の中に埋め込まれていて、文末は敬体となっている。十年前と現在では大差ないという表現は両者に見受けられる。

2.3 強制収容所における抑留者の平均年齢

2.3.1 『無抵抗の抵抗』

これに反し私たち日本人の場合は、この労働者の交替——労働力の新陳代謝——が絶対に行われないという根本的なちがいがあがる。すなわち十年前私たちの平均年齢は三二・六才——それでもなお一般ソ連人収容所、もしくは捕虜収容所より遥かに高いのである——であつたが、十年後の今日昭和三十一年一月第一分所ハバロフスク事件関係者の平均年齢は何んと四二・六才となつてきている。これで十年前と同じ建築の荒仕事をするのである。どんなに頑張つてみたところで、同一の成果——労働所得を得ることができないはずがない。(23頁)

2.3.2 『不毛地帯』

これに反し、われわれ日本人の場合は、労働力の交替が絶対に行なわれない、十年前のわれわれの

平均年齢は三二・六歳であつたが、現在の平均年齢は四二・六歳となっている。これで十年前と同じ荒仕事をするのであるから、どんなに頑張つてみたところで、同一の収入を得ることは出来るはずがない(304-305頁)

2.3.3 比較分析

「これに反し」以下では、日本人収容所における抑留者の年齢が十年前と比較すると、単純に十歳分上がっている様子が語られる。平均年齢は両者全く同様で、「三二・六歳」が「四二・六才」に変化したとなっている。「どんなに～はずがない」という文の作りにも変化がない。「労働力の交替」が「絶対に行われない」は「行なわれない」として送り仮名のみ変更されている。

2.4 天引き額・四五六ルーブル

2.4.1 『無抵抗の抵抗』

そして日本人労働者各個人に支払われる、いわゆる賞与金は次の三つの条件を必要としている。

- (イ) 作業班全体の作業遂行率が一〇〇パーセント以上であること。
- (ロ) この班の中で四五六ルーブルの稼ぎ高をあげた者のみに支給する。
- (ハ) 四五六ルーブル以上の稼ぎ高であつても、その人が月に二日以上休んでいる場合は、失格とする。(25頁)

2.4.2 『不毛地帯』

その上、日本人に支払われる賃金の中から収容所運営維持費として四百五十六ルーブルが天引かれ、実際に手に残るのは六、七十ルーブルしかない(305頁)

2.4.3 比較分析

「456ルーブル」という数字がそのまま『不毛地帯』に引き継がれている。

2.5 天引き額の内訳

2.5.1 『無抵抗の抵抗』

私たちは平素この各人からの天引額四五六ルーブルについて、収容所当局に一再ならずその説明を求めた。収容所当局はこれにたいして、囚人には収容所の会計にタッチする権利はないとして返答を拒否していたが、余りの督促にたまりかねたのか、あるとき収容所側が非公式にといつて説明した四五六ルーブルの支出内訳は次のようなもので、まことにはや驚き入つた次第であつた。

食費	二六〇ルーブル
被服費	五〇ク
寝台その他器具損料	二〇ク
文化費	一〇ク
運搬費（食料，薪炭等）	一六ク
入浴費	二五ク
便所掃除費	一五ク
税金	三〇ク
人件費	一五ク
光熱費	一五ルーブル ^(ママ)
計	四五六ルーブル

この表の矛盾をついてみよう。

まず食費の二六〇ルーブルは現地の小売物価と対照して相当に高値である。

(中略)

次に被服費月五〇ルーブルだが、もしこの計算でいけば年六〇〇ルーブルとなる。成程、規定のように毎年新品の被服を支給するとすればこの計算になるが、私たちに支給されるのは警備兵やソ連人収容所から持ってきたお古が多く、どんなに甘くみても二年に一回新品を貰えたら結構な方で、営内作業者にいたつてはほとんどが数年来新品を着たことがないという状態であつた。

(中略)

寝台その他、器具損料二〇ルーブル、これは説明するだけヤボのようである。

文化費とは一体何であろうか。私たちはこれとは別個に各自の手取金の中から文化費として供出していた。ソ連自体から支給されたものが書籍一冊、新聞一部、紙一枚でもあつたらうか。

(中略)

運搬費といわれる燃料、食料等の運搬、却下積載は全部私たちの無料使役である。

(中略)

便所掃除費に至つてはなおさらだ。それこそ噴飯物だ。

(中略)

税金また税金で一体何回税金をとるかといいたくなる。

(中略)

珍らしい搾取ではある。(26-29頁)

2.5.2 『不毛地帯』

「その上、日本人に支払われる賃金の中から収容所運営維持費として四百五十六ルーブルが天引かれ、実際に手に残るのは六、七十ルーブルしかな

い、しかし、われわれはこの天引額四百五十六ルーブルについて大きな疑問を持ち、過日、収容所長に説明を求めたところ次の通りであつた」

机の上に、数字を並べたメモを広げた。

食費	二百六十ルーブル
被服費	五十ク
寝台その他器具損料	二十ク
文化費	一十ク
運搬費（食料，薪炭 ^{しんたん} 等）	十六ク
入浴費	二十五ク
便所掃除費	十五ク
税金	三十ク
人件費	十五ク
光熱費	十五ク
計	四百五十六ルーブル

「以上ですが、まず食費は街の小売物価に比べて高価であり、被服費は殆ど警備兵のお古で、二年に一回、新品が貰える程度、寝台その他器具損料については失笑に値し、文化費も書籍一冊、新聞一部も支給されず、運搬費、便所掃除費に至つては、すべてわれわれの手で行なっているはずである、なお税金に至つては、世界のどこの国に、囚人が税金を払う国があるか、まさに噴飯ものである、このような経費の差引は、不当搾取以外の何ものでもない」(305-306頁)

2.5.3 比較分析

天引額456ルーブルの内訳が示されるが、項目と数字が全く同様である。

2.6 抑留者の健康保持基準

2.6.1 『無抵抗の抵抗』

(1) 健康保持に関する事項

- (イ) 発熱三十七度以上、神経痛、痔、高血圧一五〇以上等の患者の室外作業を免ず。
- (ロ) 五十一～五十五才の老令者の営外作業免除、五十六才以上の営内外作業の免除。
- (ハ) 医務室の人的改善、作業休の決定に関しては医師以外の干渉を許さず。

(2) 団長、文化部長に対する団員一同の推薦制を認めること。

(3) 重症患者、高令者、婦女子を至急帰国させること。(75-76頁)

2.6.2 『不毛地帯』

一、健康管理に関する事項

- ① 発熱三十八度以上、高血圧一八〇以上、神経痛、痔等の患者の戸外作業を免除。
- ② 五十一～五十五歳の高齢者の戸外作業免除、五十六歳以上の戸内活動免除。
- ③ 医務室の人道的改善、作業休の決定に関して医師以外の干渉を受けない。

二、重症患者、高齢者を至急、帰国させること。 (302頁)

2.6.3 比較分析

『不毛地帯』では『無抵抗の抵抗』の(2)が略されている。「健康保持に関する事項」は「健康管理に関する事項」に微変換され、「発熱」「高血圧」の数字にも若干の違いはあるが、(イ)(ロ)(ハ)の細目はそのまま①②③に受け継がれる。(3)は「二」に対応しており、「婦女子」のみが省略されている。

2.7 東アジア諸国の人々からの激励

2.7.1 『無抵抗の抵抗』

この懲罰食命令に関して私は、私たちの東洋の友人たちの友情について思い出すことがある。

当時、私たちの第一分所には、中国人、朝鮮人、蒙古人らが合計約六〇名いて、第六バラックに住んでいた。(112頁)

(中略)

二十二日の夜であつたか、二十三日の朝であつたか、彼らの代表が私に面会を求めてきた。会ってみれば是非、私たちの運動に参加させてくれとの申込みである。そこで彼らの友情に感謝しつつも、私は彼らと私たち日本人の本質的な立場の相違を明らかにして、彼らの申し出を拒絶した。

私たち日本人にとつては、私たちが温かく迎えてくれる祖国がある。祖国の人々は私たちが祖国への反逆者とは考えていない。また、私たちが現在ソ連においてこのような不服従運動を起していてもこれが祖国にたいする不服従運動とはならない。私たちがソ連に於て破廉恥罪を犯さない限り、祖国は何時でも心よく迎えてくれる。

ところが彼らの場合には、状況が全くちがう。このシベリヤの地でふるまつた行動が、ソ連において犯罪と見做れる場合には、それはとりもなおさず彼らの母国においても、そのまま彼らの国家にたいする犯罪となるのである。だからもし、こ

こで集団の力によつて事無きを得ることができるとしても、帰国後はかならずこの犯罪をもつて罰せられることは明らかである。

私たちと同一運命にある彼らが、その運命を切り拓かんとする真意は充分理解できるが、こういつたような私の見解の下に、彼らを彼らの祖国にたいする反逆者とするにはしのびない。ましては彼らがソ連に連れてこられた原因そのものが、日本に協力したということにあるので、これにたいしては私たちは、どうお詫びを申し上げてよいか判らない。この上になおさら、新たな迷惑をかけることはできないというのが、私の弁明の辞であつた。

彼らはこれを了解してくれ、では直接的な運動参加は差控へるが、これから先は蔭にあつて十分のお力添えをしたいといい残して残念そうに立ち去つた。このときの彼らの約束は、懲罰食施行とともに、直ちに実行に移された。彼らは自らの食事を節約してパンをため、これを夜毎密かに私のところに運んでくれた。その量は多くはない。しかしその心根はこよなくありがたかつた。私はこれを二、三日ためては青年隊に廻したものである。また彼らは、ソ連からは日本人と区別されて使用されていたし斗争になつてからも営外の仕事に出ていたので、積極的に情報を集めてこれを知らせてくれた。

とかくするうちに、彼らが日本人に関する情報提供に役立たなくなつたこと、かてて加えて日本人に合流する危険性さえあることをソ連が悟るに及んで、これら中国人、朝鮮人、蒙古人全員が他に移動しなければならない時期がきた。

十二月の末、暮れも押しせまつた日であつたと想う。出発の前夜、彼らの長老が密かに私を訪れてきた。今でも私はこれらの人々の名前をはつきりと記憶している。しかしこれを公表することは許されない。それは私が公表することによつて、これらの人々はかならず今彼らがいる場所で——それがソ連内であろうとまたはそれぞれの祖国であろうと——直ちに検挙処罰されるであろうからである。

これらの人々は、つれだつてきたのではない。一人一人が他にも知らせず、せめて自分一人でも、それぞれが考えていることをいい置いて袂を分たうとしてきたのだが、くしくも彼らの言はずべてが一致していた。

「私たちはあなた方日本人を見損つていました。今まで私たちはソ連に抑留されてからというもの何と日本人は意気地のない奴らだ。ソ連人のいうこと、収容所の命ずることすべてを惟々諾々として受け入れ、どんなに不合理なこと、どんなにひどい取扱いをされても、一言半句の反駁も加えることができない。

何んと不甲斐ない人々なのか。これが終戦まで私たちが、兄貴分としてたててきた指導民族の真の姿であつたのか。私たちはこんな民族に仕えてきたのかと情けなく思つてきました。そして私たちは日本人と手を取り合つて助け合わない許りか、反動的に日本人を馬鹿にし、軽蔑し、これを虐待さえしてきました。日本人の私たちにたいする寛容さを理解することすらできずに……。しかし十二月十九日のあの出来事によつて、私たちは始めてこれまでの非を悟ることができました。

日本人はその忍耐の限度が破れたとき、一糸乱れざる堅い団結の下に力強く立上り、真の日本民族の姿を見せてくれました。

矢張り日本民族は、私たち東洋民族の兄貴分たるに十分な資格を持つていました。今まで私たちが卑屈、意気地なしとみてきたのは、日本人の忍耐と教養の高さの故であり、盲従、屈従とみてきたのは日本人の心の寛容さでありました。

もし私たちが生きて祖国に帰ることができたならば、今日私たちがこの眼でみた日本民族の真実の偉大さを、祖国の人々に説明することでありましょう。正義はかならず勝ちます。邪悪が正義を打ち敗ることはできないはずであります。

私たちもこれを信じますが、日本人もどうか正義は最後に勝つという信念の下に、雄々しく目的貫徹に邁進していただきたい。私たちは今後いかなる地にありましようとも、かならずあなた方が堂々と勝ち切つて祖国に帰られることを祈つております。」

そういつつ、これらの人々は皆私の手を握りしめて泣いた。或る老人は泣いた後ニッコリとして、「こんな顔では外にも出られないから、しばらく休ませて下さいね。」と十分許り泣顔を静めてから始めて立ち去つていった。(112-116頁)

2.7.2 『不毛地帯』

「ここを開けて下さい、私たちは第七バラックの中国人と朝鮮人の代表です」

低い声で云った。同じ収容所内に二百五十名の

中国人と朝鮮人がおり、いつも日本人に対して反感を剥出しにしていたから、用心深く扉を開くと、夜の闇の中に二人の黒い人影がたっており、バラックの中へ入るなり、

「われわれも、あなた方、日本人の闘いに参加させて戴きたい」

あまりにも、唐突な申し出に神森や壹岐たちは、戸惑い、返事が出来ずにいると、中国人の方が、「われわれは今日まであなた方、日本人を軽蔑していたことを詫びます、正直なところ、シベリアに抑留されてから私たちが見た日本人は、ソ連からどんな無謀な扱いを受けても、一言の文句も云わず、これが曾て、私たちが東洋の兄貴分としてたてて来た日本人かと情けなく思い、日本人を頭から馬鹿にし、軽蔑しました、しかし、今回の作業拒否、集団絶食の拳を聞き知るに及び、同じ東洋民族としての誇りを感じると同時に、是非、われわれも一緒に行動させて下さい」

謙虚に曾ての非礼を詫び、共に行動する熱意を訴えた。壹岐の胸に、東洋人同士の温かい血の触合いを覚えたが、

「有難う！ 今まで何かと迷惑をかけた私たちに協力を申し出て下さってお礼の言葉もありません、だが、私たち日本人は今回のような行動を起しても、祖国はそれを理解し、受け容れてくれます、しかし、あなた方の場合は、ソ連での行動が、そのままあなた方の祖国において国家叛逆罪とみなされる危険がありますから、ここで私たちと一緒にたち上り、ことなきを得ても、帰国後、あなた方の身の上に、必ず迷惑がかかることが明らかです、したがって皆さんの気持は有難いが、今までも迷惑をかけた上に、さらに新たな迷惑をかけることはしのびません」

東洋の友の厚情に感謝しつつも、彼らと日本人たちの立場の相違を説いて、申し出を辞退すると、落胆の面持を見せたが、

「解りました、ではせめてわれわれの食事を節約して、あなた方日本人に分けたり、収容所側の情報を収集したりする協力をさせてほしい、そして私たちが生きて祖国に帰ることができたら、私たちがこの眼で見た日本民族の真実を伝え、東洋民族の誇りにしたいと思います、どうか最後まで雄々しく闘って戴きたい」

と云い、激励の手をさしのべた。(310-312頁)

2.7.3 比較分析

『不毛地帯』ではモンゴル人が削除されているが、中国人と朝鮮人がやってきて、それまで反感をむき出しにしてきたことを詫び、共闘を申し出たという話の展開は全く同様である。また、生きて帰国できた暁には日本人の真の姿を祖国の人々に語り継いでいきたいとの言葉も大筋において変わっていない。

2.8 無抵抗の抵抗

2.8.1 『無抵抗の抵抗』

全員がよく歯を喰いしばつて無抵抗の抵抗、暴力を用いないという申合せを守ってくれたことを有難く思った。(329頁)

2.8.2 『不毛地帯』

「なる程、モスクワの大物をひきつける術が、無抵抗の抵抗という基本路線で、果してそんなことが可能だろうか」(308頁)

2.8.3 比較分析

「無抵抗の抵抗」とは、石田三郎が手記の作品名として採用した言葉である。彼のハバロフスク事件に対する立場はこの言葉によって象徴的に表明されている。石田の作品名がそのまま登場するとなると、これは山崎が参照した文献名を読者に意図的に示していると解釈することもできる。同時代読者の中には、石田の作品について知識を持っていた者もあったとみられる。ノンフィクション風に仕立て上げるために、わざと参照文献の所在を示したとすれば、読者に『無抵抗の抵抗』を見つけてきてください、そうすれば、『不毛地帯』の作品構造が明確化するとメッセージを込めているとさえ受け取ることができるのである。引用改変の足跡を作者が読者に辿れるように導いているならば、著作権に関する考え方が現時点と比較してみてそれ程緻密に考えられているとは言えない様子も明らかとなってくるのである。

2.9 集団絶食を巡る解釈

2.9.1 『無抵抗の抵抗』

「言うことは判つた。善処する。君の問題については、私が定めることだ。追つて考える。大部分の者には何の処罰も行わない。ところで君らは表面は絶食を宣言しておりながら、実際には多量の食糧をストックして食べていたではないか。このような行為はソ官憲を偽瞞したとは思わない

か。」

「そうは思わない。われわれは絶食を宣言して以来、収容所から糧秣を受領していない。この意味から公式上には絶食ということが出来る。しかし本質はそういつた形の問題ではないはずだ。われわれが絶食手段によつて果そうとしている窮極の目的が『健康で帰国する』ということにある以上、可能な範囲で体力の減退を防ぐのは認めらるべきだ。」(333頁)

2.9.2 『不毛地帯』

「だが、日本人は本日の行動によつて、わがソ同盟に重大な侮辱を与え、体面を穢した、表面は集団絶食を宣言しておきながら、実際には多量の食糧を隠蔽し、食べていたではないか」

囚人の血を吸い尽くしたような脂ぎったミハイロフ中將の顔に、怒気が満ち、壹岐を睨みつけたが、壹岐は怯むことなく、

「われわれは、絶食宣言して以来、収容所から糧秣を受領していない、その意味から公式上の絶食ということが出来る、しかし、本質はそういつた形の問題ではないはずである、われわれが集団絶食という手段によつて果そうとしている究極の目的が“生きて帰国する”ということにある以上、可能な範囲での体力の減退を防ぐのは認められるべきだと思う」(316-317頁)

2.9.3 比較分析

ソ連側が集団絶食を標榜しておきながら、実際には隠し持っていた食糧を食べていたのだから絶食に値しないと詰め寄るのに対し、そのような批判は本質を突いていないと石田（『不毛地帯』では壹岐）が切り返す場面である。この応答は日本への帰還という目標のために絶食を行うことに本質が存在するという論理や、公式上の絶食という受け答えも含めて、同様の内容と認められる。

2.10 禁錮1年

2.10.1 『無抵抗の抵抗』

こうして私たちは署名しない、承認しない判決文で、行政処分による禁錮一年となつたのである。(339頁)

2.10.2 『不毛地帯』

日本人を煽動して不服従運動を行ない、収容所の秩序を乱した罪で、禁固一年に処せられたのだった。(318頁)

2.10.3 比較分析

「禁錮」が「禁固」に改められてはいるが、この一文が意味する内容は全く同様である。

3. 秦彦三郎『苦難に堪えて』

3.1 即時停戦をもって臣子の分と考える

3.1.1 『苦難に堪えて』

大御心に叛いて勝手な振舞いをして何の国体の護持ぞ、自分は大御心のままに即時戦闘行動を停止するを以て臣子の分と考える。もしあくまで抗戦を主張するならばわれわれの頭をはねてから実行せられたいと、瞑目して聞いておられた山田軍司令官は、私の言葉が終ると直ちに、「自分も参謀長の考えと全く同じである」と一言いわれ、聖旨を奉戴して即時停戦すべきことを裁決された。若い幕僚も納得し頭を垂れて幾度かうなずいた。しかし無条件降伏、即時停戦ふたたび溢れ出る涙はいかんともすることができない、作戦室はしばしたとえようのない静寂につつまれた。(29頁)

3.1.2 『不毛地帯』

「静まれ！ 聖旨に叛いて何の国体であるか、陛下の大御心のままに即時、戦闘行動を停止するをもって、臣子の分と考える、あくまで抗戦を主張し、行動するならば我が首をはねて、然る後に行け！」

秦参謀長の声が響き渡った。それまで瞑目して論議が尽されるのを待っていた山田司令官が、口を開いた。

「自分も参謀長の考えと全く同じである、聖断は既に下された、これに反すれば私兵だ、自分は私兵を動かすつもりはない！ ことここに至っては聖旨を奉戴することあるのみ、進むも退くも、奉公の道は一つである」

そう裁決すると、山田司令官の眼から一筋の光るものが伝った。一同、肅然とし、若い参謀たちの眼から滂沱と涙が溢れ落ち、抑えかねる号泣が洩れた。(27頁)

3.1.3 比較分析

「参謀長」の言葉はそのまま受け継がれ、それを受けた山田司令官が「自分も参謀長の考えと全く同じである」として停戦判断を下すという文章の流れも基本的には継承されている。

3.2 ワシレフスキー元帥との会見の時間

3.2.1 『苦難に堪えて』

同地の司令部はわれわれのため急速に飛行場の近くの民家を掃除して休憩所にあてた模様で、床の上に絨毯代りに毛布を敷き、便所を新設するなどわれわれ軍使に対し敬意を表す意図があるように見えた。大佐が接待役となり、朝からシャンパンを抜き、黒イクラその他戦場としては過ぎた御馳走であった。朝食が済んでしばらくすると例の接待掛の大佐がふたたび現われ、

「昼食は何時にするか？」

との質問である。こちらは昼食どころではない。

「一体何時にワシレフスキー元帥に会えるのか？」

と質問すると、彼は、

「私は貴下に何時に食事を差上げるべきかをきき、それを処置するのを任務とするものである」

とってけろりとして取りつく島がない。任務の単一化といおうか、防諜の徹底といおうか、堂々たる大佐がこの任務に専念していて、しかも他のことは一切知らないで平気では誠には恐れ入った次第である。やがて別の大佐がでてきて関東軍の現況を盛んにきこうとするが、ワシレフスキー元帥との会見の時間については何にもいわない。たびたび催促の結果いよいよワシレフスキー元帥との会見の時間がきまった。先方は秦中将一人に会おうといっている。こちらは細部のことは主任参謀をして説明させるから同行したい、また通訳として宮川総領事を同行させたいというのがなかなかきかない。やつのことで通訳と作戦主任との連行を許され、宮川、瀬島の二人を連れて行くことになった。(33-34頁)

3.2.2 『不毛地帯』

飛行機は国境を越え、野原の真ん中にある滑走路に着陸した。舗装は全く施されておらず、国境に近い山中から推して、ジャリコーウォの秘密飛行場のようなであったが、周囲を見渡す間もなく、せきたてられるようにジープに乘せられ、木造の建物に連れて来られた。急造の建物らしく、荒削りの床板には絨毯代りに毛布が敷かれ、日本軍軍使に対する表敬の意が感じられたが、ワシレフスキー元帥との会見場所でないことは明らかであった。

扉がノックされ、一同が緊張した面持でその方

を見ると、接待係の将校が、貴下たちは朝食をまだ摂っておられぬようなのでと、兵隊を指図して朝からシャンパンを抜き、キャビア、サーモン、白パンなど、戦場とは思えぬ贅沢な食事を山ほど並べた。呆気にとられている壹岐たちに、
「ご遠慮なく存分に召し上げるがよい、昼食にも好みの料理があれば申し出られたい」

と勧めた。

「ご芳志は有難いが、われわれは一刻も早くワシレフスキー元帥と会見したい、何時に会えるのだ」

情報参謀の野原少将が云うと、

「私は接待を申しつかった者だから、ワシレフスキー元帥との会見時間などあずかり知らない、貴官らはロシア料理はお好みだろうか」

重ねて聞いた。壹岐はたまりかね、

「われわれは会見の時間を聞いている、貴官が知らなければ、直ちに司令部へ問い合わせられたい」

強く要求すると、接待係の将校はしぶしぶ承知したと頷き、出て行ったが、その後、何時間待っても返事がない。再度、宮川総領事を通して催促すると、三度目に別の将校が来て、会見の時間を知らせ、日本側は秦参謀長と大本営参謀の壹岐の二人だけに限ると云った。

秦参謀長は、即座に首を振った。

「私は参謀長である、したがって細部の説明については三人の参謀の同行が必要である、また公式会談である以上、ロシア語の通訳として、宮川ハルピン総領事の同行を求める」

断固として主張すると、半時間後に許可された。(32-34頁)

3.2.3 比較分析

ワシレフスキー元帥との面会時間を気にする日本側と昼食の提供に終始するソ連側の様子の違いが同様に書き分けられている。また、会見にロシア語通訳として宮川船夫ハルピン総領事の出席が必要だとする日本側の主張も両者同様に描かれている。

3.3 司令部の防空施設

3.3.1 『苦難に堪えて』

午後一時出発、自動車は森林内の新設道路を四、五分走ったであろうか、幾つかの歩哨の関門を通過して会見所へはいった。ここで最も感心したことは司令部の防空施設が実によく徹底してできていたことである。各道路は完全に上空に対して遮

蔽してあり、司令部の建物はそれぞれ小さな組立家屋を分散配置し、しかも上空に対しては完全に遮蔽している。さすがに歴戦の経験者であるとの感を深くした。おそらく日本の飛行機は司令部の所在を発見することができなかつたであろう。(34-35頁)

3.3.2 『不毛地帯』

壹岐たちはジープに乗せられ、総司令部に向った。起伏の激しい山中で、白樺の疎林の間に、今まで止めおかれた建物と同じような丸太の小屋が幾つも見える。総司令部の建物に通じる道路も、いつの間にこれだけのものを造ったのか、すっかり出来上り、ところどころに遮断機が設けられて、歩哨が嚴重に哨戒している。しかし壹岐たちが最も驚いたのは、防空施設が徹底していることで、道路、建物の上には遮蔽網が大規模に張りめぐらされ、さらに木の枝で掩われ、上空に対して完全に遮蔽されている。これなら壹岐が関東軍にいた時、情報部で密かに偵察機を飛ばし、航空写真を撮っても、総司令部の所在は、発見出来ないはずであった。(34頁)

3.3.3 比較分析

司令部が飛行機からは見えないように設計されており、発見できなくて当然であった様子が両者共に描かれている。

3.4 会見参加者

3.4.1 『苦難に堪えて』

会見所にはワシレフスキー元帥を中央にザバイカル方面軍司令官マリノフスキー元帥、沿海州方面軍司令官メレチコフ元帥、極東空軍司令官ノーヴィコフ航空元帥、太平洋艦隊司令官ユマレエフ提督が列席し、他に一少将と一大佐が会談の要旨を速記していた。(35頁)

3.4.2 『不毛地帯』

午後三時半、総司令官ワシレフスキー元帥は、ザバイカル方面軍司令官マリノフスキー元帥、沿海州方面軍司令官メレチコフ元帥の他、極東空軍司令官、太平洋艦隊司令官を従えて入って来た。秦総参謀長以下、壹岐たち軍使は軍帽を取り、敬礼した。(34頁)

3.4.3 比較分析

会見参加者の内訳が記されるが、『苦難に堪えて』において実名で登場する5名は、『不毛地帯』でも全く同様の順序で描かれているのである。

3.5 ワシレフスキー元帥について

3.5.1 『苦難に堪えて』

ワシレフスキー元帥は第二次世界大戦中スターリンの総参謀長として、実質的に赤軍一千万の作戦指導に当たった人であるだけあって、その悠々迫らざる態度は偉大なる体軀と相まって、偉風堂々見るからに智勇兼備の將軍らしい風采をそなえていた。(35頁)

3.5.2 『不毛地帯』

壹岐が情報部資料によって知っているところでは、ワシレフスキー元帥は一八九五年生れで、今次大戦中、スターリンの参謀総長として、赤軍一千万の作戦指導に当たった智勇兼備の誉れ高い將軍であり、(35頁)

3.5.3 比較分析

ワシレフスキー元帥が第二次世界大戦において赤軍1000万人の作戦指導に従事した名将である事実は、「智勇兼備」という共通の四字熟語によって表現されている。

3.6 メレチコフ元帥について

3.6.1 『苦難に堪えて』

メレチコフ元帥は体軀矮小で一見癩癩持ちらしく、(35頁)

3.6.2 『不毛地帯』

メレチコフ元帥は小さな体を慌しく動かしながら、枝葉末節のことも日本側の返答が遅いと、口汚く怒鳴った。(35頁)

3.6.3 比較分析

メレチコフ元帥はワシレフスキー元帥とは対照的に負の形容語で描写されるが、「癩癩持ち」という記述が「返答が遅いと、口汚く怒鳴った」という具合により具体的に言い換えられている。

3.7 日本軍の名誉尊重と居留民の保護、給食量

3.7.1 『苦難に堪えて』

私は関東軍の一般状況を説明した後、日本軍の名誉を尊重せられたいこと、および居留民の保護に万全を期せられたいことの二件を強く要請した。これに対しワシレフスキー元帥は、わが方の要求を快く承諾し、特に日本軍人には階級章および帯刀(劍)を許し、将官には専属副官および当番を、将校には当番を許すと言明した。また給養にかんしては、日本人は米を常食とし、米食しなければ体力が保てないので米を食わせて貰いたい

と要求したところ、これに対し元帥の判決は日ソの折衷案をとり、主食は黒パン三百グラム、米三百グラムということになった。これは俘虜生活の最後まで効力を持続した唯一の規定であった。(36頁)

3.7.2 『不毛地帯』

秦参謀長は同意を表明した後、

「日本軍から特にお願いしたいことが三点あり、申し述べさせて戴く、一つには敗れたりといえども、日本軍の名誉を尊重せられたい、日本には古来、武士道があり、帯剣は是非とも許されたい、一つには在留邦人の保護と早期帰還に万全を期せられたい、一つには日本軍将兵の抑留は、住居、被服、糧秣が確保されている満州国を希望するとともに、国際捕虜法であるジュネーブ条約を厳守されたい」(36頁)

「抑留中の給食に関しては、日本人は米食を常食とし、米食でなければ体力維持が保てないので、その点、考慮して貰いたい」

と要請すると、傍らからメレチコフ元帥が小柄な体一杯に怒気を漲らせ、そんなことは不可能だと頭から撥ねつけたが、ワシレフスキー元帥は、主食は黒パン三百グラム、米三百グラムという協定にする旨、回答した。敗者の立場からはそれ以上の要求は出来かねた。

「では、主食一日、黒パン三百グラム、米三百グラムをもって、体力保持の最低限の量とお考え戴きたい」(37頁)

3.7.3 比較分析

日本軍の名誉尊重、並びに居留民の保護と早期帰還の実現要求が等しく、さらには主食の内容に関する要求の箇所ではグラム数まで一致している。また、要求を出す順序も同じである。

3.8 人質の要求

3.8.1 『苦難に堪えて』

私等を人質にしようとしていると直感した。

「協定を速かに且円満に実施するため一刻も早くかえらねばならぬ。一分遅れるとそれだけ彼我の損害がふえ、無益の犠牲を払うだけでないか」

といたら、

「それではあなたの代理者を折りかえし派遣されたい」

とのことであったから、

「明朝参謀副長を派遣する」

と約束して会見を終った。(37-38頁)

3.8.2 『不毛地帯』

「しからは、ハルピン飛行場にある日本軍の飛行機を、ソ連の監視下で飛行させ、われわれを迎えに寄こして戴きたい」

秦参謀長が、語気を強めると、

「それは、総司令官である私自身が決定することである」

と突っ撥ねた。秦参謀長の顔色が変わった。ワシレフスキー元帥は、まだ関東軍の全面降伏を信じていないのだった。関東軍が完全に降伏し終るまで、軍使一行を人質にしておく魂胆が読み取られた。

「われわれが今、かわした協定を速やかに且つ円満に実施するためには、一刻も早く帰らねばならない、われわれの帰還が一刻、遅れば、それだけ両軍の損害が増え、無益の犠牲が増すだけである」

強く云うと、

「それでは、貴官らの代理者を折り返し派遣されたい」

公然と、人質を要求した。

「承知した、帰り次第、派遣する」

と約束すると、はじめてワシレフスキー元帥の表情がほぐれ、飛行機の用意を命じた。(37-38頁)

3.8.3 比較分析

ワシレフスキー元帥が帰路を急ごうとする日本側に対して人質を要求する場面であるが、早く帰りたいとの発話に対して、「代理者」を要求するとの応答が一致している。

3.9 ジャリコーヴォから新京へのフライト

3.9.1 『苦難に堪えて』

自動車でもとの飛行場にかえり、すぐに帰ろうと思ったが、先方はやれ食事だ、何だかんだといてなかなか飛行機を出してはくれない。日没後やっと出発、新京に向った。吉林上空まで来ると、大雨のため方向が全くわからなくなってしまった。その中に燃料は逐次消費し尽し、しかも飛行機はどうも連京線を突破して西方に出てしまったらしい。瀬島中佐は機関室に入り切りで操縦手をたすけ、辛うじて新京の上空に達したが、暗くて飛行場の様子は全然わからない。その中地上でも気づいたのであろう、満航の飛行場で枯草を焚いて滑走路を示してくれたのでやっと着陸すること

ができた。(38頁)

3.9.2 『不毛地帯』

飛行場に着くと、偵察機が用意されていたが、まだ整備が整っていないから待ってほしいと云い、事務所で再び待たされた。何とか日没前に出発しなければと、焦ったが、整備するソ連兵たちの動作はひどく緩慢に見え、故意に出発を遅らせているようにも思われた。

午後八時五分、飛行機はやっと飛び発った。壹岐たちの間に、ほっとした吐息が洩れ、あとは一路、新京へ向うばかりであった。司令部に帰って、各方面軍に直ちに連絡しなければならぬことを考えると、飛行機の中で走りたいような衝動に駆られた。

吉林上空まで来た時、突然、稲妻がひらめいたかと思うと、雷鳴が轟き渡り、真っ黒な雲に包まれた。大雨が機体を叩きつけ、上下に激しく揺れながら飛行を続けたが、いつまでたっても新京に着かない。窓ガラスは雨で曇り、外は真っ暗で視界はきかない。方向を誤っているのではないかという不安が、壹岐の胸に来た。ジャリコーヴォを発ってから飛行時間からみて、正常な飛行状態とは考えられなかった。

ソ連の将校も気になるらしく、何度も席をたって操縦室に入りしていたが、宮川総領事と呼んで、昂奮した声で喋った。宮川総領事は蒼白んだ顔で、

「雷雨のため、全く視界がきかず、燃料を逐次、使い果しつつあるということです」

と伝えた。機内に動揺の気配がたった。壹岐の胸に、このまま機体とともに墜落死出来たらという思いが胸を掠めたが、関東軍七十万の将兵の命運を思うと、席をたち、操縦室の扉に手をかけた。ソ連将校は拒むように両手を広げたが、壹岐はその手を払い退け、操縦室へ入った。(38-39頁)

(中略)

雨が止み、水面らしき反射面が見える。しかしよく見ると、河ではなく湖のようであった。新京南西の丘陵に人造湖があったのだ。

「あれは湖だ、進路を北にとり、次に鉄道を探せ」

新京の街に通じる満州鉄道を探し出すために、高度を下げさせると、黒々と濡れ光る松花江が拡がり、等間隔の小さな灯りが、にじむように見えた。

「眼下に見える線路に沿って南へ飛行すれば、新

京飛行場へ^{たど}辿り着ける！」

と云うと、操縦兵は壹岐の指示に従って、さらに高度を下げた。

十分後、真っ暗な視野の中に、新京飛行場の標識塔の灯りが見えた。しかし飛行場は真っ暗で、滑走路が全く解^{わか}らない。燃料は既に尽きかけていたが、壹岐は、上空で旋回を続けるよう命じた。二度、三度、やっと地上で、着陸を求める機体に気付いたらしく、飛行場の枯草に、点々と火が点けられた。枯草の炎の中で、滑走路が見えた。

「着陸態勢に入れ！」

壹岐の呼号で、操縦兵は^{あぶらあせ}脂汗を浮かべながら^{かん}桿に力をこめ、一気に滑走路に降下した。機体は大きくバウンドし、着陸した。

壹岐の顔から滝のように汗が^{したた}滴り落ち、^{ぼうぜん}呆然と枯草の炎を見た。(39-40頁)

3.9.3 比較分析

日没後に飛行機をやっと離陸させることができたが、雨のために全く視界がきかなくなり、瀬島龍三(『不毛地帯』では壹岐正)の判断で操縦手に与えた助言の結果、ようやく新京の飛行場に着陸し得た様子が描かれた箇所である。飛行場が枯草を焚いて滑走路を示したという状況も同様である。秦は瀬島が操縦手を助けたと記したが、その様子は『不毛地帯』では操縦兵に向かって壹岐正が直接話法で指示を出すという形に書き改められている。

3.10 作戦業務

3.10.1 『苦難に堪えて』

なおこの日すでに作戦業務がなくなったので、司令部の編成を改め対ソ交渉班と内務班との二つに分け、対ソ交渉班には第二課長浅田大佐以下ロシア語に通ずる将校以下を以てこれに当て、停戦に関する交渉に当らせた。(40頁)

3.10.2 『不毛地帯』

作戦業務がなくなった部屋は、扉も窓もぴたりと閉ざされ、むっとした熱気がこもっていた。(43頁)

3.10.3 比較分析

「作戦業務がなくなった」という記述は全く同様である。

3.11 軍司令部の引き渡し

3.11.1 『苦難に堪えて』

カバリオフ大将以下には、宿舎として軍人会館を提供してあったが、彼らは逐次図々しさを増し、盛んに軍司令部の引渡しを要求するようになった。(41頁)

3.11.2 『不毛地帯』

「参謀長、こちらにおられましたか！ ^{ただいま}只今、ソ軍から司令部明け渡しの命令が参りました」

ソ連新京進駐軍には、司令部の向い側の軍人会館を提供してあったが、さらに司令部引渡しを要求して来るなど、信じられぬことであった。(44頁)

3.11.3 比較分析

ソ連軍には「軍人会館を提供してあった」が、相手はそれだけでは納得せず、司令部の引渡しまで要求するようになったという箇所に関する表現はほぼ一致している。

3.12 関東軍総司令部の海軍武官府への移転

3.12.1 『苦難に堪えて』

海軍武官府へ移転後のわれわれは、鉄のみならず足まですっかりもぎ取られた蟹のような存在であった。武器として所持していたのは表門衛兵の所持する十数挺の小銃と、将校が各自持っている拳銃および軍刀のみである。通化へ持って行ってその後持ち帰る機会を失い、地獄の沙汰も金次第というその金もない。連絡機関としては無線機ただ一機だけで、これで大本営に窮状を訴えてその善処を仰ぐほか、残された道はソ軍と折衝してその人道的処置を要請するだけである。

この頃以降ソ軍の地上部隊が続々と新京市内に進駐して来た。彼らの姿を見ると真黒に汚れて垢でピカピカ光っているギムナスチオルカ(上衣)をただ一枚まとい、腰に弾薬匣をつけ、手にヴィントフカ(小銃)を持っただけである。

顔も手も垢と塵埃で真黒で目ばかりギョロギョロしている。道端の水溜りの水を手で掬って飲み、どこから取って来たか缶詰の缶を大きなナイフでたたき切っては、手ずかみでむしゃむしゃ食っている。ビールは栓を歯で噛み切ってラッパ飲みである。誠に野蛮といおうか、何といおうか表現の言葉を知らない野獣のような姿である。きちんとした服装と態度をしている日本の兵隊さんを見馴れている者にとっては、その汚さと恐しさ

は見ただけで気絶しそうな感を与える。このような兵隊が戦勝の余威を駆って掠奪、強姦、暴行を処かまわずやるのだから堪らない。特に彼らは酒を飲むと全く気狂いと同じである。徒党を組んで民家に押入り何をするかわからない。居留民は夜などは全く生きた気持はない。電灯を消し、表戸を閉して嚴重につっぱりを掛けて戦々競々として夜を過す。しばしば軍司令部に窮状を訴えて来るが、司令部としても今は何らの力も無く、わずかにソ軍当局に取締を要求するのみでほかに術はない。さらに手のつけられないのは白昼堂々とソ軍将校が部隊を指揮して来ては品物をトラックに満載して行く掠奪である。放心した居留民の前に次に襲い掛って来るのは満人の暴民である。彼らはソ軍の後について来て床板から窓硝子まで外して持って行ってしまふ。

このような状態の中へ奥地から避難民が着のみ着のままで続々とはいって来た。これらの人々は軍人軍属の官舎や学校などに収容されたが、その惨状は全く形容の言葉もない。終戦後日とともに、満人の貧民は暴民化し、倉庫を襲って軍需品を掠奪するようになった。これに対しソ軍はその警備に協力してくれないのみならず、かえって日本軍に対し文句をいって来る状態である。

満州の冬の訪れは早い。ぐずぐずしているともうすぐ酷寒が迫って来る。(42-44頁)

3.12.2 『不毛地帯』

関東軍総司令部が海軍武官府へ移転して、一週間で過ぎた。

前の司令部の建物から北へ二キロ、西広場に面した一画に、移転とは名のみ、指揮統率のすべてを剝奪され、軟禁状態におかれていた。司令部が武器として所持しているのは僅かに、表門衛兵が持っている十数挺の小銃と、将校が携えている拳銃、軍刀だけで、外部との連絡機関は、無線が一機、許されているのみであった。

壹岐にとって、海軍武官府へ移ってからの毎日、牢獄の日々であった。

「壹岐、見る、ソ連兵どもがまた進駐して来た——」

秦参謀長が、窓外を眼で指し、吐き捨てるように云った。その方を見ると、新京駅の方向から黒々としたソ連兵の隊列がこちらに向かって進行して来る。兵隊たちは汗と塵埃にまみれた体に、垢じみたよれよれの軍服をまとい、手に小銃を持っ

ていた。銃だけは見事なほど真新しかったが、長い行軍で疲弊しきっているらしく、道端の水溜りの水を手で掬って飲み、缶詰の缶をナイフでたたき切っては、手づかみで貪っているなど、規律正しい日本軍からみれば、野獣の群れのような野蠻さであった。

壹岐は、ソ連兵の隊列から眼をそむけた。既にソ軍の地上部隊は続々と新京市内に進駐していたが、兵隊たちは勝戦の余勢をかって掠奪、暴行を重ね、特に酒を飲むと狂暴になり、居留民の生活を悲惨のどん底に陥れていた。司令部へ救護を求めに来る満州国政府関係者、避難民はひきもきらなかつたが、軟禁されている壹岐たちは手のかしようもなく、ソ軍当局にソ連兵の取締りと邦人の早期帰還を要請するのみであった。しかしそうした要請は一顧だにされず、西広場に落ちのびて来た満蒙開拓団に至っては、所持品はもちろん、下着まで剥ぎ取られ、裸の上に辛うじて麻袋をかぶり、顔と手足だけを出した異様な姿で、三日間、口にしたものは水だけという凄惨さであった。

「参謀長、このままでは、間もなく襲って来る激冬期を前にして一般在留民は餓死、凍死をまぬがれません、大本営へ窮状を訴え、中央部から事態の打開を図るよう依頼すべきだと思います」(45-46頁)

3.12.3 比較分析

関東軍総司令部は海軍武官府への移転を余儀なくされたが、無線一機のみで外部との連絡を行うより他になかった。ソ連軍は次々に新京へと進駐してきたが、「掠奪」や「暴行」を行い、不潔な様子は「野獣」のようにさえ映った。日本側は「ソ連当局」に「取締り」をひたすら求めるしかなかったが、それらの描写は両者で共通しているのである。迫りくる厳冬への怯えも併せて共に付け加えられている。

3.13 武装解除

3.13.1 『苦難に堪えて』

九月五日午前十一時頃、カバリオフ大将から軍司令官と参謀長に来てくれと、スミルノフ少将が自動車で迎えに来た。さてはいよいよ軍司令部の武装解除か？ 最後か？ と直感し、かねて準備していた洗面道具と日用品入れのボストンバックを持ち司令官と同行した。

行先は軍人会館と思っていたのに車はどんどん

満州国政府のある康德街方向へと走る。その中車は張総理官邸の前に止った。カバリオフ大将はいつの間にか総理官邸を見つけ出し、これに移転していたのであった。彼はきわめて慇懃に私共を迎え、応接間に通した後、総司令官ワシレフスキー元帥の命令で、本日軍司令部の武装解除を行い、われわれはじめ在新京将官を他に移動せしめる旨を伝え、将官は専属副官および当番兵を同行せしめるとのことであった。

私は軍司令部の武装解除は私の責任の下に実施するから、もう一度司令部に帰してくれるように要求した。彼は当惑相な顔をしていたが、しばらくしてそれでは帰ってもよいといったので司令部に引返した。(49-50頁)

3.13.2 『不毛地帯』

「カバリオフ司令官より、本日、新京に在留する関東軍将兵全員を、元総司令部へ集合せしめるようにという命令がありました、私は山田司令官と秦参謀長をお迎えに来たので、すぐご同行願いたい」

慇懃だが、有無を云わさぬ威圧的な語調で云った。一同は、総司令部に武装解除の時が来たことを直感した。いつの日かと覚悟はしていたことであり、各自、予め用意していた身廻り品を携帯し、海軍武官府を出発した。

関東軍総司令部の元の建物に車が着くと、新京市内に分散していた兵隊約千名と司令部職員五十数人が、既に営庭に整列させられていた。

山田司令官、秦参謀長一行が車から降りたつと、左右に道が開かれた。壹岐は自分たちの一挙手一投足に、兵隊の固唾を呑むような視線が当てられていることを痛いほど感じながら、唇を引き結び、正面中央にたっているカバリオフ司令官の前に歩んで行った。

カバリオフ司令官は、肥満した体をそらせ、「ソ連極東総司令官ワシレフスキー元帥の命令により、今から関東軍司令部の武装解除を行ない、山田司令官、秦参謀長以下、在新京将兵を他の地点に移動する」

と告げた。山田司令官は、ぐうっとカバリオフを睨み据え、

「関東軍将兵の武装解除は、総司令官である私が行なう」(47-48頁)

3.13.3 比較分析

カバリオフより軍司令官と参謀長に来てもらい

たいとの知らせがあったことを受け、軍司令部の武装解除を覚悟して臨んだところ、その通りであったことが記される場面である。間接話法で描かれたカバリオフと秦のやり取りは、『不毛地帯』では会話文の直接話法に書き換えられているが、その内容には違いがない。

3.14 ハルピン経由シベリア送り

3.14.1 『苦難に堪えて』

司令部の武装解除が終ると早速出発である。同行したのは在新京将官とその専属副官並びに当番兵のほか、作戦及び情報両課長、作戦主任の瀬島中佐、それに大本営から連絡に来ていた朝枝中佐である。(50頁)

(中略)

飛行場にはわれわれのため二台の飛行機が準備してあった。一行は司令官の組と、私の組と二組に分れて乗込んだ。搭乗に先だちソ連の通訳官は特別に自分等を」いたわり、

「行先はハバロフスクで今晚はハルピン泊りだ。秘密だから誰にもいってくれるな」

とささやいた。(51頁)

3.14.2 『不毛地帯』

武装解除後、山田司令官、秦参謀長以下二十六名の幕僚は、新京飛行場へ連行された。

一行の乗った飛行機は行先を告げられなかったが、その日、ハルピンで一泊した後、なお北上を続ける飛行機の進路で、誰しもシベリア送りとなることを察した。(49頁)

3.14.3 比較分析

ソ連の通訳がこっそり行先を教えてくれたという箇所が、行先不明と変更され、さらに直接話法から間接話法に書き換えられている。ハルピン泊、ソ連行きという行程も踏襲されている。

3.15 コルホーズでの馬鈴薯採取援助受諾

3.15.1 『苦難に堪えて』

九月末になると河水は日々減少し、寒さは日に増してきた。ある日収容所長がやってきて相談があるのだという。何かと思ったら附近のコルホーズで労力の不足から馬鈴薯の採取が遅れて困っているから援助して貰いたい。報酬として採取量の四パーセントを差上げるとのことであった。一同に計ったところ、賛否両論種々の意見もあったが、結局一同を二班に分ち、昼食後二、三時間づつ援

助することになった。(62-63頁)

3.15.2 『不毛地帯』

シベリアの秋は短い。十月初旬というのに、寒気を覚える。(62頁)

(中略)

そんな或る日、収容所長から近くのコルホーズが労力不足で馬鈴薯の採取が遅れて困っているから、協力して貰いたいという申し入れがあった。

軍事俘虜を使役に使うことは国際法で禁じられていたが、運動がてらに一日、数時間ずつ、協力することにした。(62頁)

3.15.3 比較分析

文章内容は同じである。秋が到来し、収容所長から馬鈴薯採取を手伝ってほしいと依頼され、それに応じたことが記されている。

3.16 トマトで潤した喉の渴き

3.16.1 『苦難に堪えて』

一生懸命汗だくになって競争して薯を掘っていると渴を訴えてきた。幸か不幸かこの附近には水がない。あってもきわめて悪質で到底飲む気にはなれない。するとコルホーズの連中が未成りのトマトを取ってきてくれる。泥まみれのトマトを掌で拭いてそのまま噛みつく。その旨さは今なお忘れ得ない。気のいいロシア人は自分のものでないトマトなので、私共が喜ばば喜ぶ程嬉しがって持ってきてくれる。帰りにはハンカチに包み両ポケットに一杯トマトをつめて帰った。(64-65頁)

3.16.2 『不毛地帯』

谷川大佐は、淡々とした口調で話し、「さてと——、慣れぬことに精を出すと、咽喉がかわく、壹岐、水を要求してくれ」

と云った。壹岐はコルホーズの役員のところへ行き、

「ヴァダー、ヴァダー（水、水）」

と頼むと、この辺の水質は悪いからと、トマトを籠一杯に入れて持って来た。まだ熟していないが、がぶりと噛みつくと、たっぷりとしたみずみずしい水分が咽喉を潤し、入ソ以来、生野菜を口にしたことのない壹岐たちは、貪るように食べた。

秋の日没は早く、薯掘りが終わった頃には、薯畑の果ての地平線に真っ赤な夕陽が沈みかけていた。

一同は両手に馬鈴薯と、トマトの包みを持ち、

収容所への帰途についた。(66頁)

3.16.3 比較分析

もともとは地の文として書かれていたものを、会話文に書き直した箇所である。水の代わりに熟れかけのトマトを持ってきてくれたので、噛みついた様子の描写内容は等しいとみてよい。食べきれなかったトマトを持ち帰った様子が付け加えられているのも同じである。

3.17 ヤゼフ少佐による経歴確認尋問の開始

3.17.1 『苦難に堪えて』

しばらくすると支部長ドルギー中將の部屋に案内された。(77頁) (中略)

「日本は無条件降伏したのである。君らは武器を捨て外形的には一応降伏したのであるが、精神的にはまだまだ全部降伏していない。すべての書類を滅却して過去の罪悪の証拠を湮滅しようとしているが、ソ連はあくまで君らの精神的降伏を要求する。無条件降伏をした日本には今や一つの秘密もないはずである。過去においてソ連に対して行ったすべての行動を告白し、その罪悪をさらけ出さねばならぬ。もし正直に事実を告白し、状況が明かになれば逐次許すつもりである。もし虚偽の申立をし事実を隠匿する時は法律によって処断せらるべきである」

と威嚇的の訓示(?)をした後、私の調査官たるべきヤゼフ少佐を紹介して会見を終った。ついで同少佐の部屋で私の経歴などの質問があつてその日は夕刻終了した。(77頁)

3.17.2 『不毛地帯』

「私は、内務省ハバロフスク地方本部取締官、ヤゼフ少佐である。深夜、ご足労をかけたが、これから今次世界大戦において、日本軍が犯した罪状を明らかにするため、貴下を取り調べる、無条件降伏をした日本には、今や一つの秘密もないはずである、したがって過去においてソ連に対して行なったすべての罪悪を正直に告白すべきである、もし虚偽の申立てをし、事実を隠匿する時は、法律によって処罰されるから、覚悟されたい」

威嚇するように訓示し、背広姿の通訳が下手な日本語で告げた。壹岐ははじめて自分が連行された理由を知った。

「まず、貴下の経歴を述べて貰いたい」(71頁)

3.17.3 比較分析

『不毛地帯』ではすべてがヤゼフ少佐とのやり

とりになっている。日本側が隠し立てをしたら処罰すると脅した上で、経歴確認から尋問が開始されるという話の筋は同様である。

3.18 迫られる精神的降伏

3.18.1 『苦難に堪えて』

「君の書いたものは巷間の本や当時の日本の新聞に書いてあったもので、そんなことをわれわれはきいているのではない。真の目的、意図をきいているのである」(78頁)

(中略)

「君は精神的に降伏する意志がない」(78頁)

3.18.2 『不毛地帯』

「お前の書いたこの供述書は子供でも知^{かみくす}っているようなことか、さもなくば嘘ばかりで、紙屑同然だ！ 貴下はわが内務省を侮辱するつもりか！」(73頁)

(中略)

「貴下の云うことは嘘ばかりだ！ 日本がドイツと組んで世界侵略を意図したことは歴然たる事実だ！ 関東軍で一年以上も作戦参謀をしておりながら、よくもそんな答えが出来るな、貴下は、いまだ精神的に全く降伏していない、今晚、一晚、よく考えることだ」(74-75頁)

3.18.3 比較分析

書かれた供述書がヤゼフ少佐の求める内容とは異なっていたために、精神的には降伏していないと判断されてしまった箇所であるが、文章の展開は同様のものとなっている。

3.19 医官による全身検査

3.19.1 『苦難に堪えて』

やがて係の者が来て被服を綿密に検査して全部取上げ、ついで医官らしい者がきて口中、耳、肛門などの検査をした後、私は小さな独房にぶち込まれた。(78頁)

3.19.2 『不毛地帯』

壹岐はその手を払い退け、自ら全裸になると、医官は聴診器を軽く二、三度、胸にあてたあと、いきなり壹岐の顎^{あご}に手をかけ、口を大きくあけさせ、歯から咽喉の奥まで診、次に耳の中を調べた上、四つ這いに這わせ、肛門に指を入れた。(76頁)

3.19.3 比較分析

医官による全身検査の場面は青酸カリを肛門付近に隠し持っていないかどうかまで入念に検査さ

れたという点を強調する形に改められている。

3.20 小使用と飲料水用の木桶

3.20.1 『苦難に堪えて』

木桶の一つは小使用、一つは飲料水用であると教えてくれた。(78-79頁)

3.20.2 『不毛地帯』

木桶の一つは小使用、もう一つは飲料水用であると教えられた。(77頁)

3.20.3 比較分析

木桶が2つ与えられ、小使用と飲料水用だったと回想される場面であるが、記述内容に大きな違いはない。

3.21 用使用紙の請求

3.21.1 『苦難に堪えて』

「紙をくれ」

と言ったら看守は黙って変な顔をしている。便所で紙を使うのが不思議らしい。やむなくズボン下の端を破って用を済ませた。(79頁)

3.21.2 『不毛地帯』

「紙をくれ」

看守兵は不思議そうに、

「ニエツト（無い）」

と首を振った。用便の時、紙を使うのが解せぬらしい。仕方なくズボン下の裾を破って、それで用をすませ、もとの独房へ引返すと、看守兵は独房内をぐるりと見渡してから、ガチャリと鉄の扉をしめた。(77頁)

3.21.3 比較分析

用便に紙を使うことを看守が理解できなかった様子が描かれている。

3.22 入浴

3.22.1 『苦難に堪えて』

「入浴に行け」

という。裸になると散髪屋が来て頭、腋下、陰部とおよそ体中毛のある処はバリカンで全部刈取ってしまった。被服は全部熱気消毒をしてくれた。きいてみるとこれは虱退治のためである。(79頁)

3.22.2 『不毛地帯』

検査が終ると、入浴するように命じた。一坪程のコンクリートの荒壁に囲まれた室内に、シャワーが数個ついているだけであった。看守兵がタオル

とマッチ箱半分ぐらいの石鹼^{せっけん}を渡しに来たかと思
うと、次に頭、腋下^{えきか}、陰部に至るまでバリカン
をあて、ジャリジャリと毛を剃り落した。虱退治^{しらみ}
のためであると説明したが、壹岐は、云いようの
ない屈辱感と怒りで体が震えた。(76頁)

3.22.3 比較分析

入浴を命じられた際、虱退治のために体中の毛
をバリカンで剃り落された体験についての描写だ
が、「頭、腋下、陰部」という順序まで一致を見
せている。

3.23 食事内容

3.23.1 『苦難に堪えて』

食事は朝一日分のパン五百五十グラムと砂糖九
グラムと白湯をくれ、昼は百グラムの麦のカー
シャ（粥）と野菜スープをくれた。肉はもちろん
骨片すらない。食器はすりばちを小さくしたよう
な土器である。夕食は塩鯨を煮出したスープ一杯
である。臭くて食べられたものではない。(80頁)

3.23.2 『不毛地帯』

七時に一日分の黒パン六百グラムと砂糖九グラ
ム、白湯が食器に半分くらい小窓からさし入れら
れた。昼は大さじ二杯ぐらいの麦の粥とキャベツ
のスープをくれたが、塩漬の腐りかけたキャベツ
が煮込まれているらしく、その臭さと酸っぱさで、
咽喉に通りにかねた。(78頁)

3.23.3 比較分析

食事内容の描写は、朝に一日分の黒パン、砂糖、
白湯をくれたとあるが、砂糖はグラム数まで一致
している。昼も粥は同じであり、スープは野菜
スープからキャベツのスープへと書き換えられて
いる。夕食は『不毛地帯』に記載がないが、スー
プの臭さに言及された箇所が昼食のスープに関す
る記述に接合されているのである。

3.24 開けられた独房の重い鉄の扉

3.24.1 『苦難に堪えて』

九時頃看守が来て独房の重い鉄の扉を開けた。

「出る」

といわれて出てみるとジープが待っていてふた
たび本部に連行された。(80頁)

3.24.2 『不毛地帯』

ようやく昼過ぎになって、看守兵が独房の重い
鉄の扉を開いた。

「ダワイ！（出る）」

独房を出て、昨夜の監獄長の部屋へ連行された。
(78頁)

3.24.3 比較分析

「九時頃」という時間は「昼過ぎ」に改められ
ているが、看守が「出る」と言い、従うと、再び
同じ場所に連れ戻されたという話の展開は同様で
ある。

3.25 紙屑と称された供述書

3.25.1 『苦難に堪えて』

ところがある日調査官の少佐が真赤になって怒り
出し、

「君の書いたものを翻訳したがほとんど何らの価
値もなく紙屑同様である」

というのであった。私は

「私は知っていることを正直に書いただけであっ
て、貴方のために利用価値があるかないかは知っ
たことではない」(81頁)

3.25.2 『不毛地帯』

「お前の書いたこの供述書は子供でも知っている
ようなことか、さもなくば嘘ばかりで、紙屑同然
だ！ 貴下はわが内務省を侮辱するつもりか！」
「そんなつもりは毛頭ない、私の知るところを書
いたまでだ」

あとは固く唇を引き結んだ。(73頁)

3.25.3 比較分析

相手が利用価値のない供述と決めつけたのに対
して、本当のことを書いたまでだと反論する会話
の枠組みは同様である。

3.26 精神的降伏の拒否

3.26.1 『苦難に堪えて』

ことごとく彼らのいう「精神的降伏」はやらない
ので、朝から晩までいぢめられ通しである。(83
頁)

3.26.2 『不毛地帯』

「(前略) 貴下は、いまだ精神的に全く降伏して
いない、今晚、一晚、よく考えることだ」(74-75
頁)

3.26.3 比較分析

精神的には降伏しない状況を自ら書き記すか、
ソ連側から言われるかの違いはあるが、いずれに
してもその結果として虐待されるという点は同じ
なのである。

4. 松村知勝「裁判と監獄」

4.1 宿泊先となった三菱会館

4.1.1 「裁判と監獄」

ウラジウォストックから飛行機で羽田に着いた私たち一行は、丸の内の三菱会館に泊められた。ここはソ連の国際裁判関係者が使っていた。(14頁)

4.1.2 『不毛地帯』

日比谷公園の前を通って、車は丸の内の特徴のある赤煉瓦の前^{あかれんが}に停^{とま}った。三菱会館^{みつびし}で、玄関にソ連旗が掲揚され、歩哨^{ほしやう}がたっている。ジープから降りると、壹岐たちは三階へ連行された。(121頁)

(中略)

「ここは駐日ソ連代表部の分室で、極東国際軍事裁判関係者はこの三階を独占しているから、貴下^{あなた}たちも同じ階に起居して貰^{もら}う(後略)(121頁)

4.1.3 比較分析

来日すると、ソ連の東京裁判関係者の滞在先である三菱会館に宿泊することとなったことが、地の文から会話文に改めて書き記されている。

4.2 草場(秋津)中将の自殺

4.2.1 「裁判と監獄」

到着の翌々日の夜、草場中将がここで自殺された。草場中将には一室が与えられ、私と瀬島中佐はその隣室にいたが、食事は中将の部屋で一緒にとっていた。この日も一緒に夕食をすませ、暫くして私たちは自室に引取ったが、何も変わった様子はなかった。

翌朝私たちが目を覚ますと、監視の将校が来て、隣へ行ってはならぬ。食事はこちらでしろという。なぜだと押問答の末、中将が昨夜心臓麻痺で死んだという。会わせろといったが、どうしても許さない。そして私たちはこの日の中に、麻布飯倉貯金局から程近い家に移された。ソ連側が借上げた個人住宅のようだった。

こうして私たちは草場中将に合わせて貰えず、死去の状況についてもはっきり知らされなかった。しかし彼らの言葉のはしから大体のことは推察された。米軍の係将校らしいのが来て、私たちにも中将の動静などについて質問した。私たちの衣服や所持品全部を、消毒するのだといって持って行った。毒物や刃物について細密検査をしたら

しい。中将は青酸カリを飲まれたらしいことは、監視将校が洩らした。(14-15頁)

4.2.2 『不毛地帯』

ジープから降りると、壹岐たちは三階へ連行された。人の気配がしていたが、各室の扉は閉ざされ、壹岐たちは廊下の突き当りの人気^{ひとけ}のない一角へ導かれ、秋津中将には一室、竹村少将と壹岐には二人で一室が与えられた。(121頁)(中略)

夕食の時間になると、食事は秋津中将の部屋で三人一緒にするようにと云われ、斜め向いの秋津中将の部屋へ食事が運ばれた。(121頁)

(中略)

朝、目覚めた壹岐は、明け方、妻を抱いた夢を見た自分を恥じながら、洗面を終え、朝食を摂るために、竹村少将とともに、秋津中将の部屋へ出向こうとした時、番兵が入って来、

「出てはいけない、食事は、この部屋ですることになった」

と押し止め、二人の朝食を運び入れた。

「なぜか? 昨日、食事は毎食、秋津中将の部屋で摂るようにと云ったではないか」

不自然さを感じ、部屋を出ようとする時、

「止まれ、部屋を出るな!」

俄かに乱暴な口調で、扉^{ドア}を閉ざした。(124頁)

(中略)

「なぜ、秋津閣下の部屋へ行ってはいけないのか」「ゲネラル・アキツは、今朝、心臓麻痺で死亡した」

「死亡? 秋津閣下が……」

あまりのことに、竹村少将と壹岐は絶句した。しかし、ヤゼフ少佐の硬^{こわ}ばった顔が、事実を物語っている。

「では、ご遺体にお目にかかりたい」

「それは規則によって、応じられないことになっている」

「死因は心臓麻痺といわれるが、閣下はハバロフスク以来、ずっと健康で、俄かに心臓麻痺が起るとは考えられない、他の死因ではないか」

壹岐も、鋭く詰め寄った。ヤゼフは、心臓麻痺だと応えるばかりであったが、壹岐には、もしや自決では、という思いがした。ハバロフスクで、極東軍事裁判の証人に出廷するよう強要され、壹岐が三人連名で、口述書以外の証言はしない旨の請願書を出そうと云った時、「各人でその意志を述べるだけで充分だ、もし意に反する時は、死ね

ばいいではないか」とさり気なく云った秋津中将の言葉が思い返された。今にして思えば、その時から、先輩、同僚が裁かれる公判廷の証人台にたつことを潔しとせず、秘かに自決を考え、加うるに焼野が原になり果てた東京の街を眼のあたりにして、人一倍、責任感の強い中将は、覚悟の自決を遂げられたものと、推し測られた。

「一目でいいから、何としても閣下のご遺体にお詣りしたい——」

重ねて頼むと、ヤゼフは、

「残念ながら、遺体は既にここにはない、米軍が検視のため運び出してしまった」

壹岐は、全身の血がひく思いがした。竹村少将の眼にも、怒りが漲っていた。いかに囚われの身とはいえ、昨夜まで、運命をともにして来た秋津中将の遺体にも対面出来ず、死の前後の状況さえも知ることが出来ぬとは——。壹岐は崩れそうになる姿勢を辛うじて保った。(124-125頁)

4.2.3 比較分析

宿泊先の三菱会館で突如、草場（秋津）中将が自殺したらしい様子が共に描かれている。もともとは地の文であったが、会話体へと書き換えられている。

4.3 極東国際軍事裁判（東京裁判）におけるソ連側証人としての出廷

4.3.1 「裁判と監獄」

ハバロフスク郊外に隔離され、私たちは個々に地方本部に呼び出され、東京公判に証人として出廷を示された。私たちは出廷を欲しないと述べたが、ソ側はもちろんこれに耳を借さなかった。私たちは捕虜の立場として出廷を命ぜられればいたし方はない。先に署名した口供書の内容を述べることを回避するものではない。ただそれ以外ソ側が何かの発言を強要しても応じられないと申出た。私たちはソ側が、何か彼に都合のいい声明のようなものを発表させることなどを心配したのである。私たちは申合せたわけではなかったが、大体同じような意味のことを述べた。ソ側は他の要求はせぬとは言ったが、従来やり口から見て、必ずしも信用は出来ないと思った。瀬島中佐は三人連名で、この趣旨の請願書を書き、ソ側から他の要求はしないとの約束を得ようと主張した。その時草場中将はこれに反対し、各人が意志を述べるだけで十分である。もし必要があれば死ねばい

いではないか、といわれた。この一言で請願書の話は立消えになったが、後から考えれば、ここにも中将の覚悟が顔を出していたのではなかろうか。(15-16頁)

4.3.2 『不毛地帯』

それから五日目、秋津中将、竹村少将、壹岐の三人が揃って、内務省に呼び出され、ヤゼフ少佐から、全く思いもかけないことを申し渡された。目下、東京で開かれている極東国際軍事裁判に、ソ連側証人として三人に出廷を求める、というのであった。

壹岐たちにとっては、それは昭和二十年八月十五日の停戦の聖断以上に衝撃であった。曾ての上司が裁かれ、祖国が裁かれる軍事法廷に、証人として引き出されるなど、恥辱以外の何ものでもない。三人は即座に峻拒した。だが、ヤゼフ少佐は、これはソ連内務省の命令であると、一蹴した。(116頁)

(中略)

壹岐たちが、極東軍事裁判の証人出廷を拒否し続け、一カ月ほど経った或る夜、ヤゼフ少佐が再び、三人の軟禁されている郊外の山荘に向向いて来た。

「モスクワからの指示が来た、貴下らがこれ以上、口供書通りの証言を極東裁判で行なうことを拒否する場合は、口供書の内容は偽証であるとしか考えられず、最初から訊問をし直せということであるが、どうか」

完全なる脅迫であった。壹岐たちは顔を見合せ、押し黙った。ややあって秋津中将が、
「どうあっても、証人として出廷しろというのか」
「そうだ、何としても貴下らが出廷しないのなら、目下、病院で入院加療中の秦参謀長に出廷を求めねばならぬが、よろしいか」

ヤゼフは、壹岐たちを逃れようのない場へ巧妙に追い込んだ。

「——俘虜の立場として、そうまで云われ、命ぜられれば、われわれは出廷せざるを得ない、しかし、これまで署名した口供書の内容以外、ソ連側が何かの発言を強要しても、絶対、応じられないが、それでいいか」

秋津中将が、念を押した。

「他の要求はしないことを、約束する」

「ならば止むを得ぬ、われわれは出廷する」

その途端、ヤゼフの薄い唇に、獲物を仕止めた

ような笑いが滲み、足早に出て行った。壹岐は、ヤゼフの約束を信じられなかった。三人連名で、重ねて署名した口供書以外の声明及び発言には応じない旨の請願書を出し、ソ連側から絶対、他の要求はしない確約を得るべきだと考え、秋津中将にこの旨を云うと、

「いや、各人がその意志を主張し、実行するだけで充分だ、もしその意に反する時は、死ねばいいではないか」

淡々とした口調で云い、

「もうきまった話だ、あとは出発まで、この家の前のウスリー河畔で魚釣りでもさせて貰おうではないか」

静かに微笑したが、妙にしみ入るような淋しさが、壹岐の心に伝わった。(117-118頁)

4.3.3 比較分析

極東国際軍事裁判（東京裁判）へソ連側証人として出廷を命じられるに際して、署名した口述書にある記載以外の発言はしない旨、約束したという話の展開、並びに瀬島中佐（壹岐中佐）が3名連名でその旨を記した請願書を出し、ソ連側に確約を求めるべきだと言ったのに対し、草場中将（秋津中将）はそれ以上の要求をされた時には死ねばよいと言ったという応答の様子は同様に描かれている。地の文は臨場感を引き起こす会話文に書き改められている。

4.4 国破れて山河あり

4.4.1 「裁判と監獄」

ウラジウォストックから羽田に向う飛行機が、佐渡上空を通った時、機上から祖国の山河を眺めた中将は、ハラハラと落涙された。実際空中から青々とした山河と赤土の焼跡とを見た私たちは「国破れて山河あり」の句がヒシヒシと身に迫るものを感じたのであるが、中将は早く祖国の土を踏んで、自決する決意を持っておられたのだらうと思う。(16頁)

4.4.2 『不毛地帯』

飛行機は佐渡ヶ島上空でぐるぐる旋回した後、新潟上空に入った。なだらかな稜線をもった山々が重なり合い、川が流れ、山間に村落と田畑が見えた。国破れて山河あり——、壹岐の胸に、ひしひしとした思いがこみ上げて来た。秋津中将、竹村少将もはらはらと落涙した。(120頁)

4.4.3 比較分析

日本へ向かう飛行機が佐渡上空を通ったこと、「その際に「国破れて山河あり」との思いが去来したこと、「はらはらと落涙」せざるを得なかったことが共に描かれている。

4.5 口供書の内容確認

4.5.1 「裁判と監獄」

口供書の内容はハバロフスクで書いたものも、東京で書いたものも、実質において変りはない。差異は言葉遣いといっている。(17頁)

4.5.2 『不毛地帯』

「死亡前に署名した故秋津中将の口供書をはじめ、あなた方二人の口供書は、事実に基づいているか」

「日本語とロシア語の微妙なニュアンスの相違を別にすると、内容はわれわれが実際に述べたものである」(127-128頁)

4.5.3 比較分析

口供書の内容が事実に基づいていることの確認であるが、形式的には地の文が会話文へと変換されたものとなっている。

4.6 ソ連側首席検事ゴルンスキーや連合国検事団主席キーナンとの会見

4.6.1 「裁判と監獄」

口供書の書き直しがすむと、ソ側首席検事ゴルンスキーが会いに来た。つづいて連合国検事団首席の米人キーナンが会いに来た。検事側から出す証人であるから、責任者として首実験に来たのである。ゴルンスキーとの面会は問題でないが、キーナンと会うとなると、ソ側の引率者は大騒ぎである。ソ側は事務的な準備をした上、私たちに「キーナンが来たら言うべきことをよく考えてくれ」という。私たちの引率者は内務省の大佐である。私たちを管理し、取調べをした側の代表者である。自分たちのしたこと、やましい点があるだけに心配になるのだ。私は彼らの取扱いを是認するものではないが、私の証言は暴力に屈していたわけではない。(17-18頁)

4.6.2 『不毛地帯』

背広が仕立て上ってから数日後、ソ連側の首席検事ゴルンスキーが会いに来、続いて連合国検事団首席である米国のキーナン検事が会いに来ることになった。ゴルンスキーとの面会は問題なかつ

たが、キーナン検事と会うことになると、ソ連側は俄かに色めきだち、ヤゼフ少佐は、今まで見せたことのない低姿勢で「キーナンに云うべき言葉は、慎重に選んで貰いたい」と何度も、念押しした。明らかに自分の取調べの仕方が強引であったことを怖れている様子であったが、壹岐も竹村も、キーナンに哀れみを乞う気持など、さらさらなかった。（126-127頁）

4.6.3 比較分析

ゴルンスキーとキーナンが会いに来たこと、ソ連側は日本人捕虜とキーナンの接触に対して、非常に緊迫した様子を見せたこと、キーナンにはいべき言葉を選んでほしいこと、並びにソ連側が荒かった取り調べを連合側から指摘されないかという点について脅えていたことも共通して描かれている。

4.7 本能の欲するままに振舞った古代民族の戦勝者

4.7.1 「裁判と監獄」

古代民族の戦勝者は、敗者の将はこれを殺し、士卒はこれを奴隷とした。本能の欲するままに振舞った彼らは、むしろ正直である。法の裁きの仮面の下で、無力の敗者をしいたげた近代人の偽善の方が罪が深いと思うのは、曳かれ者の小唄であろうか。（50頁）

4.7.2 『不毛地帯』

古代民族の戦勝者は、敗者の将は殺し、士卒は奴隷とし、女は妾とし、本能の欲するままに振舞ったが、むしろその方が正直で、すっきりしている。法の裁きの仮面の下で、無力の敗者を虐げる近代人の偽善の方がよほど罪深い——（153頁）

4.7.3 比較分析

この個所はほぼ同じ内容を踏襲したものとなっている。『不毛地帯』では女性を売春婦として扱ったことが付け加わっている。

4.8 25年の刑

4.8.1 「裁判と監獄」

対ソ情報に従事したことは、第五十八条六項の謀報の罪に当り、二十五年の矯正労働に値する。機動旅団編成は第五十八条九項の謀略の罪に当り、同じく二十五年に値する。よってこれを総合し、矯正労働収容所における二十五年の労働に処する。これらの罪は本来死刑に相当するが、今死

刑は廃止されたから、二十五年の刑でこれに代える。被告の私有財産はこれを没収する。（54-55頁）

（中略）

関東軍参謀瀬島龍三中佐は、クリエールに任じたことで謀報の罪を負わされたが、その外に同中佐が、大本營で日本の大東亜戦争作戦計画に参加したことが、資本主義幫助であるとした。（61頁）

4.8.2 『不毛地帯』

「検事側より提出されている起訴状に基づき、判決を申し渡す。

- 一、日本軍陸軍中佐、壹岐正は、一九四三年、参謀本部勤務の軍人である身分を偽り、外務省書記生としてクイビシエフへ潜入したことは、ロシア共和国連邦刑法第五十八条九項の反ソ謀報罪に相当する。
- 二、同被告は、一九四〇年十二月から一九四四年二月までの三年間余にわたり、参謀本部作戦参謀の任にあり、大東亜戦争の作戦に関与したことは、同五十八条四項の資本主義幫助罪に相当する。
- 三、同被告は一九四四年、関東軍司令部作戦参謀として、機動旅団編成に参画し、作戦命令を下したことは同五十八条九項の反ソ謀報罪に相当する。

以上の罪を総合し、戦犯壹岐正に強制労働二十五年の体刑を科する、これらの罪は本来、死刑に相当するが、ソ同盟では人道上、死刑を廃止しているので、二十五年の刑をもって、これにかえる」（232-233頁）

4.8.3 比較分析

刑法第58条に抵触する罪により、25年の矯正収容所での労働を死刑に代えて命じるとの判決が地の文から、会話文に直された上で、記述されている。また、瀬島の大東亜戦争作戦計画への参加は資本主義幫助罪に相当するという箇所を『不毛地帯』では判決文にまとめて表現していることが分かる。

4.9 戦犯の現地国法適用への反発

4.9.1 「裁判と監獄」

日本はポツダム宣言を受諾し、戦犯を連合国に引渡すことに同意した。連合国はA級戦犯を国際裁判にかけ、それ以下の戦犯は、現地国がそれぞれその国の法に従って裁判することに協定した。

しかし、ソ連国民に対するように、又ソ連の主権下で行われた事件に対するように、ソ連国内法をそのまま捕虜に適用することは私には納得出来ない。(55-56頁)

4.9.2 『不毛地帯』

「戦犯を現地国で裁判する協定のあることは知っているが、無条件に現地国の国内法を適用することは承知できない。(233頁)

4.9.3 比較分析

戦犯にソ連の国内法を適用して裁くことに同意できない趣旨が地の文から会話文に変換されて記録されている。

5. おわりに

以上、山崎豊子が参照した形跡がみられる例を挙げ、比較分析を行ってみた。すると、語句個々の異同もさることながら、文章の展開具合まで一致が観察されるケースを多数発見した。

山崎は「1. はじめに」で述べたように、作品の巻末に「参考文献一覧」を掲げている。ここという「参考」とは、改変引用の可能性まで考えられる文献として捉えられよう。

この状況は、今井や遠藤が告発したレベルでの「盗用」に相当すると判断できる。ならば、『不毛地帯』における壹岐正のシベリア抑留に関する箇所は「花宴」と同様に削除されなければならなくなると言っても過言ではない。けれども、全集にも採録され、文庫本としても今なお出版の上、流通されている訳であるから、本稿で示したような実態はこれまで黙視されてきたのである。

付記

本文の引用は山崎豊子[2004]、石田三郎[1958]、秦彦三郎 [1958]、松村知勝 [1958] によった。

比較分析し、表現が酷似している箇所には下線を付した。

注

- 1) 山崎豊子 [2004]、山崎豊子 [2005a]、山崎豊子 [2005b]、山崎豊子 [2005c]
- 2) いまいげんじ [1973]
- 3) いまいげんじ [1980]
- 4) 鶴飼清 [2002]
- 5) 遠藤誉 [1984]
- 6) 遠藤誉 [1997]

- 7) 鶴飼清 [2002]
- 8) 前川文夫 [2005]
- 9) 栗原裕一郎 [2008]
- 10) 山崎豊子 [2004] 537-538頁
- 11) 石田三郎 [1958]
- 12) 秦彦三郎 [1958]
- 13) 松村知勝 [1958]
- 14) 秦郁彦 [2005] 126頁
- 15) 秦郁彦 [2005] 150頁
- 16) 山崎豊子 [2004] 538頁
- 17) 石田三郎 [1958] は、ハバロフスク事件を「昭和三十年十二月十九日私たちの生命が危殆に瀕したとき、第十六収容所第一分所日本人七六九名が、ソ連の非人道性に抗して、作業拒否という方法で待遇改善を叫んで決起したのである。しかし昭和三十一年三月十一日未明、ソ連内務次官ボチコフ中将の無警告武力弾圧によつて、ここに統一的集团的運動が瓦解し、その後分散させられた各個の集団が個別斗争によつて要求貫徹にむかつた。そして大体六月に至つて待遇の面ではほぼ所望の目的を達するに至つたのである。」(2頁)と総括する。

参考文献

- 石田三郎 [1958] 『無抵抗の抵抗 ハバロフスク事件の真相』日刊労働通信社
- いまいげんじ [1973] 『シベリヤの歌 一兵士の捕虜記』牧野出版社
- いまいげんじ [1980] 『山崎豊子の『盗用』事件』三一書房
- 鶴飼清 [2002] 『山崎豊子 問題小説の研究 社会派「国民作家」の作られ方』社会評論社
- 遠藤誉 [1984] 『卡子 出口なき大地 1948年満州の夜と霧』読売出版社
- 遠藤誉 [1997] 『卡子の検証』明石書店
- 栗原裕一郎 [2008] 『〈盗作〉の文学史』新曜社
- 秦郁彦 [2005] 『日本陸海軍総合事典 第2版』東京大学出版会
- 秦彦三郎 [1958] 『苦難に堪えて』日刊労働通信社
- 前川文夫 [2005] 『山崎豊子への誘い』白地社
- 松村知勝 [1958] 「裁判と監獄」、徳永笹市編 [1958] 『裁判 監獄 防諜 ソ連囚人政策の裏面 戦犯、抑留者の体験したレポート』日刊労働通信社
- 山崎豊子 [2004] 『山崎豊子全集 第12巻 不毛地帯(一)』新潮社
- 山崎豊子 [2005a] 『山崎豊子全集 第13巻 不毛地帯(二)』

引用改変の状況（徳永）

新潮社

山崎豊子 [2005b] 『山崎豊子全集 第14巻 不毛地帯(三)』

新潮社

山崎豊子 [2005c] 『山崎豊子全集 第15巻 不毛地帯(四)』

新潮社